

英日翻訳方略体系に基づく「直訳」「意識」の訳出分析

山本真佑花¹ 藤田篤² 影浦峯¹

¹ 東京大学 ² 情報通信研究機構

概要

本研究では、しばしば用いられる「直訳」「意識」という言葉が具体的にはどのような翻訳現象を表しているのかを、山本ら [1] の英日翻訳方略体系に基づいて分析した。この結果から以下の2点がわかった。まず、文書ごとの書き換え数の合計を、直訳、意識間で比較したところ、両者に固有の特徴は見つからなかった。また、事例に対応する方略の頻度分布からは、直訳では、S13 (Focus change) の操作が多く使用されていた一方で、意識では、G12 (Omission)、S5 (Abstraction change) の操作が多く使用されていた。

1 はじめに

翻訳品質に対して翻訳業界が扱う言葉やその定義には常に曖昧さが含まれているが、近年、これらの整理が研究と実践の双方で進められている。たとえば、翻訳誤りを評価する指標としては、MQM [2]、JTF 翻訳品質評価ガイドライン [3]、英日翻訳向け校閲カテゴリ体系 [4] などがある。これらは、翻訳成果物に含まれる、解釈誤り、用語誤り、レジスタ違反などの翻訳誤りを分析的に評価する指標であり、複数人間での合意形成やコミュニケーションの円滑化に寄与する。

一方で、翻訳品質を評価する際には、「直訳」「意識」「自然」「わかりやすい」など、評価者の主観的な判断で使用される言葉（主観評価表現）も用いられる [5]。経験のある作業員間であればこうした言葉の解釈はある程度まで共有できるかもしれないが、経験の程度が異なる複数人の間で解釈を共有することは困難である。そのため、このような主観評価表現が意味する翻訳現象を明らかにすることで、評価者間および翻訳作成工程における参加者間のコミュニケーションの向上が望めるほか、その後の円滑かつ統一的な翻訳品質の同定にも寄与する。

本研究では、主観評価表現の中でも専門分野横断

的に使用頻度が高く [5]、対極的に使用されることが多い、「直訳」および「意識」という2つの言葉に着目し、これらがどのような翻訳現象を表しているのかを、山本ら [1] の英日翻訳方略体系に基づいて分析した。なお、これらの言葉は、翻訳の発注者（クライアント）による翻訳発注時あるいは成果物の評価時に使用する場面も想定されるが、クライアントの解釈は様々であるため特定が困難である。そこで本研究では、プロ翻訳者が上記の2つの言葉をどのように訳出しているか、という観点で分析を行った。

2 先行研究

西野ら [5] は、翻訳業界で使用される主観評価表現の使用頻度を分野や所属ごとに整理した。西野らは、英日翻訳において主観評価に使われていると考えられる言葉を翻訳指南書などから抽出し、得られた110の言葉の使用頻度を翻訳者や翻訳会社の在籍者に尋ねる調査を実施した。その結果、「直訳（直訳的・直訳調）」と「わかりやすい」が専門分野によらず使用者の割合が最も高く、「意識（意識的・意識調）」、「読みやすい」、「自然」などが続くことがわかった。また、分野別の結果からは、金融・経済・法務分野では、「フォーマル」や「格調ある」などの言葉が、特許・知財分野では、「逐語訳」や「不明瞭」などの言葉が、他の分野と比較して使用頻度が高いことも明らかになった。

しかしながら、これらの主観評価表現が具体的にどのような現象を指すために用いられているのかは、明らかにされていない。経験の程度が異なる複数人の間で解釈を共有するためには、この点を明らかにすることは必須である。

3 英日翻訳方略体系

本研究の訳出分析には、山本ら [1] の英日翻訳方略体系を使用した。この体系は Chesterman [6] の翻訳方略体系をもとに構築されており、Syntactic

strategy、Semantic strategy、Pragmatic strategy の3つの方略グループからなる。各方略グループには、14種類、12種類、12種類の方略が含まれている（方略の一覧は、付録 A の表 5～7 に記載）。

山本らは、英日翻訳方略体系の構築にあたり、誤りではないが改善の余地がある訳を「素朴訳」、さらなる品質向上のために書き換えられた訳を「適訳」、素朴訳を適訳に書き換える操作を「翻訳方略」と呼んでいる。「素朴訳」は次のように定義されている。

起点テキストの文の先頭から順に、最小の翻訳単位で訳出され、特に必要でなければその最小翻訳単位を拡張することなく訳された状態の訳文。可能な限り、一般的にいう「直訳」に近いもの。その状態の訳文において、起点言語の命題に関わる情報が過不足なく訳文で表されていること。また目標言語側の文法的な誤りがないこと。ただし、言語表現としての適切さや文章としての結束性を満足しているとは限らない。

このように、山本らの英日翻訳方略体系は、最低限の品質が担保された素朴訳を、翻訳目的に合わせるよう書き換える操作を体系的に整理したものである。本研究の目的である「直訳」「意識」の訳出分析を行うにあたって、この英日翻訳方略体系は、「直訳」「意識」という仕様に合わせるための操作に着目することができる点で適切な分析道具である。

4 「直訳」「意識」の訳出分析

本研究では、翻訳方略が「素朴訳から適訳への書き換え操作」と定義されていることをふまえ、あらかじめ作成した素朴訳を「直訳調」、「意識調」の適訳に書き換えた結果を収集し、これらの言葉に対して実際に適用された具体的操作を分析した。

4.1 分析用事例の収集

本研究では、金融・経済・法務分野（以下、単に金融）、医学・医薬分野（以下、単に医薬）、工業・科学技術分野（以下、単に工業）の各々に属する1文書、計3文書を使用した。3文書各々に対し、次の手順で分析対象事例を収集した。

1. 各文書に対して、著者のうち1名が素朴訳を作成した。
2. 翻訳会社を通じて、社内評価が特に高いプロ翻訳者に素朴訳から適訳への書き換えを依頼した。その際、翻訳仕様書にて各文書を「直訳

調」、「意識調」にするよう指示するとともに、「直訳調」への書き換えは普段から直訳調の訳出をする傾向がある翻訳者を、「意識調」への書き換えは普段から意識調の訳出をする傾向がある翻訳者を従事させるよう指示した。今回は、6文書（3文書×2つの言葉）すべて異なる翻訳者が書き換えを担当した。

3. 上記により得られた6種類の文書から、著者のうち1名が、素朴訳と適訳の間で表層上の違いがあり、かつ互いに独立に書き換えられたと判断されるものを個別の書き換え事例として抽出した。書き換えがなされていない文は、分析対象外とした。各文書の先頭から順にパラグラフ単位で書き換え事例の抽出を進め、直訳と意識それぞれの訳文において約50事例が得られたところまでを分析対象とした。
4. 上記により得られた事例に対して、著者とは別の作業者が、抽出単位のダブルチェック、適訳への誤り混入チェック、素朴訳の書き換え箇所に対する校閲カテゴリ [4] 付与を行った。校閲カテゴリの付与は、素朴訳は誤りを含まない前提であるため、この時点で校閲カテゴリ体系に基づいて誤りを修正していると考えられる書き換え事例を除外し、翻訳方略の適用とみなせる書き換え事例のみを残すことを意図している。

得られた分析対象箇所の記述統計および事例数を表 1 に示す。

4.2 翻訳方略の付与

4.1 節の手順で得た分析対象の書き換え事例に対して、著者のうち1名が、山本ら [1] の英日翻訳方略体系の Syntactic strategy、Semantic strategy、Pragmatic strategy のそれぞれから1方略ずつを付与した。判断に悩んだ場合は、他の著者2名に相談の上で方略を確定した。

5 分析結果

方略を付与した結果を、全書き換え事例数と、書き換えが表す方略の頻度分布の観点から分析した。

5.1 全書き換え事例数

表 1 の全書き換え事例数を見ると、医薬分野では直訳よりも意識の方が書き換え数が著しく多い一方で、工業分野では意識よりも直訳の方が書き換え数が多かった。金融分野では、書き換え数に大きな差

表1 分野・言葉ごとの記述統計および事例数

	パラグラフ数	原文ワード数	全書き換え事例数	分析対象外	素朴訳の誤り修正	適訳への誤り混入	分析対象
金融 (直訳)	10	219	59	5	12	2	40
金融 (意識)	10	219	53	3	12	1	37
医薬 (直訳)	8	139	47	6	6	0	35
医薬 (意識)	8	139	80	2	12	8	58
工業 (直訳)	7	310	67	1	2	1	63
工業 (意識)	7	310	51	0	11	0	40

表2 方略数とその合計 (Syntactic strategy)

	金融		医薬		工業		合計	
	直訳	意識	直訳	意識	直訳	意識	直訳	意識
G2	1	0	2	2	1	0	4	2
G1	12	11	3	18	22	20	37	49
G13	4	3	5	4	7	4	16	11
G9	1	2	6	6	9	1	16	9
G11	4	4	3	2	3	1	10	7
G12	0	8	4	7	1	3	5	18
G14	3	0	2	0	0	0	5	0
G3	5	0	1	2	2	4	8	6
G5	2	2	0	2	2	2	4	6
G6	4	4	5	3	9	3	18	10
G7	0	0	0	0	0	0	0	0
G4	3	3	4	11	7	1	14	15
G10	0	0	0	0	0	0	0	0
G99	0	0	0	0	0	0	0	0

表3 方略数とその合計 (Semantic strategy)

	金融		医薬		工業		合計	
	直訳	意識	直訳	意識	直訳	意識	直訳	意識
S9	0	0	0	0	0	0	0	0
S11	1	2	1	1	1	3	3	6
S14	6	5	4	2	0	0	10	7
S2	0	0	1	0	0	0	1	0
S4	2	2	1	1	3	1	6	4
S13	5	3	3	6	16	5	24	14
S12	3	4	2	4	5	6	10	14
S3	0	0	0	1	1	1	1	2
S5	3	1	4	11	1	5	8	17
S7	3	4	2	2	1	2	6	8
S99	0	0	0	0	0	0	0	0
S100	16	16	17	29	35	17	68	62

表4 方略数とその合計 (Pragmatic strategy)

	金融		医薬		工業		合計	
	直訳	意識	直訳	意識	直訳	意識	直訳	意識
Pr1	1	0	0	0	0	0	1	0
Pr5	0	0	0	0	0	0	0	0
Pr2	0	1	0	1	0	0	0	2
Pr3	2	1	2	2	1	0	5	3
Pr4	2	5	0	0	0	0	2	5
Pr6	0	0	0	1	2	1	2	2
Pr14	7	13	8	9	3	0	18	22
Pr13	10	3	10	14	12	5	32	22
Pr12	5	8	1	2	8	10	14	20
Pr15	4	2	7	8	12	9	23	19
Pr99	0	0	0	0	0	0	0	0
Pr100	8	4	7	20	25	15	40	39

はなかった。3節で述べたように、素朴訳は、一般的にいう「直訳」に近いものと定義されており、そのような素朴訳を直訳調の適訳に書き換える場合は書き換え事例数が少ないであろうと想定していた。しかしながら、収集した事例からその限りではないことがわかった。素朴訳は、必要がない限りは最小翻訳単位を拡張することなく訳され、言語表現としての適切さや文章としての結束性を満足しているとは限らない訳文であることから、完成度の高い「直訳」には、完成度の点で素朴訳に対して多くの方略が適用されていた。

5.2 方略の頻度分布

金融、医薬、工業分野の直訳、意識事例に対する方略数とその合計を、方略グループごとに表2~4に示す。

Syntactic strategy の合計を見ると、直訳、意識のどちらを見ても、G1 (Substitution) の操作が最も多かった。顕著な違いとしては、G12 (Omission) の合計が直訳では5件であったにもかかわらず、意識では18件と、全体で2番目に多く使用されていた。このことから、意識では、素朴訳にある自立的文法要素を適訳で削除する操作が多く行われていることがわかった。例(1)の太字部分は、意識調への書き換えにおいて、G12 (Omission) の操作がなされた事

例である。

(1) 原文: **The** total purchase price was \$282.50.

素朴訳: **その**総購入金額は 282.50 ドルでした。

適訳 (意識): 総購入金額は 282.50 ドルでした。

意識では、例(1)のような指示語や、主語や目的語など、文脈から自明に理解される要素を削除する操作が多く行われていた。

Semantic strategy の合計を見ると、直訳、意識のどちらにおいても S100 (No semantic changes) の操作が最も多かった。これは、直訳、意識を問わず、意味論的な変化を生じない範囲での書き換えが多いことを意味する。直訳では、S13 (Focus change) が

意識と比べて多く使用されていた。一方で、意識では、S5 (Abstraction change) が直訳と比べて多く使用されていた。例 (2) の太字部分は、直訳調への書き換えにおいて S13 (Focus change) の操作がなされた事例、例 (3) の太字部分は、意識調への書き換えにおいて S5 (Abstraction change) の操作がなされた事例である。

(2) 原文: A product may contain **one device or multiple devices**.

素朴訳: 製品には **1つのデバイス** または **複数のデバイス** が含まれる可能性があります。

適訳 (直訳): 1つの製品には **1つ** または **複数のデバイス** が含まれる可能性があります。

直訳であっても、例 (2) のように、視点を変更して表現する操作は多く行われていた。

(3) 原文: Numerous **international, national, and professional organizations** publish guidelines and recommendations for travelers.

素朴訳: 多くの **国際、国内、専門機関** が渡航者向けのガイドラインや推奨事項を出版している。

適訳 (意識): 多くの **米国内外の団体** や専門的な団体が海外渡航者を対象とするガイドラインや推奨事項を発行している。

意識においては、例 (3) のように、意味を具体化または抽象化する操作が多く行われていた。

Pragmatic strategy の合計を見ると、直訳、意識のどちらを見ても、Pr100 (No pragmatic changes) の操作が最も多かった。このことから、直訳、意識を問わず、語用論的な変化を生じない範囲での書き換えが多いことがわかった。Pr13 (External Information adaptation) も多く出現しているが、この原因として、今回は用語集やスタイルガイドを参照せずに素朴訳と適訳を作成していたため、固有名詞の表現・表記や文体などにおける書き換えが翻訳者の判断で行われていたことが考えられる。これは、直訳、意識の言葉に起因する書き換えではないと考える。例 (4) の太字部分は、Pr100 (No pragmatic changes) の操作がなされた事例である。

(4) 原文: One or both of the equipment authorization procedures **apply**.

素朴訳: 機器認証手順のどちらか一方または両方を適用する。

適訳 (直訳): 機器認証手順のどちらか一方または両方が該当する。

直訳、意識ともに、例 (4) のように、誤用論的な変化を生じない操作が多く行われていた。

6 まとめ

本研究では、評価者の主観的な判断で使用されることが多い主観評価表現のうち、専門分野を問わず使用頻度が高く、対極的に使用されることが多い、「直訳」および「意識」という2つの言葉に対して、これらがどのような翻訳現象を表しているのかを、山本ら [1] の英日翻訳方略体系に基づいて分析した。具体的には、金融、意識、工業分野の文書に対して、それぞれ異なるプロ翻訳者に、素朴訳を「直訳調」および「意識調」の適訳に書き換えさせた。そして、得られた個々の事例を翻訳方略体系に基づいて分析することで、「直訳」および「意識」を実現させるために使用される操作を明らかにした。

文書ごとの全書き換え事例数からは、医薬分野では直訳より意識のほうが書き換え数が著しく多い一方で、工業分野では意識より直訳のほうが書き換え数が多いことが観察された。金融分野では、書き換え数に大きな差はなかった。素朴訳の定義をふまえ、直訳のほうが書き換え数が少ないと想定していたが、直訳、意識の書き換え数に顕著な差異はなかった。

事例に対応する方略の頻度分布からは、Syntactic strategy については、意識時に G12 (Omission) の操作が多く行われていることがわかった。Semantic strategy については、直訳時に S13 (Focus change)、意識時に S5 (Abstraction change) 操作が多く行われていることがわかった。Pragmatic strategy については、Syntactic strategy や Semantic strategy で観察されたような特徴的な差異は見つからなかった。

今後は、各分野で直訳、意識複数名分のデータを用意することで、様々な翻訳者の訳出を比較する。また、「直訳」「意識」以外の主観評価表現についてもそれらが表す翻訳現象を分析する。

謝辞

本研究の一部は、日本学術振興会科研費補助金基盤研究 (S)「翻訳規範とコンピテンスの可操作化を通じた翻訳プロセス・モデルと統合環境の構築」(研究課題番号：19H05660) の支援を受けて行われた。

参考文献

- [1] 山本真佑花, 藤田篤, 影浦峽. メタ言語としての英日翻訳方略体系の洗練と検証. 日本通訳翻訳学会第 24 回年次大会, p. 25, 2023.
- [2] Arle Lommel, Hans Uszkoreit, and Aljoscha Burchardt. Multidimensional Quality Metrics (MQM): A framework for declaring and describing translation quality metrics. **Re-vista Tradumàtica**, Vol. 12, pp. 455–462, 2014.
- [3] 一般社団法人日本翻訳連盟. JTF 翻訳品質評価ガイドライン, 2018. (2024 年 1 月 11 日閲覧).
- [4] 豊島知穂, 藤田篤, 田辺希久子, 影浦峽, Anthony Hartley. 校閲カテゴリ体系に基づく翻訳学習者の誤り傾向の分析. 通訳翻訳研究への招待, Vol. 16, pp. 47–65, 2016.
- [5] 西野竜太郎, 新田順也, 山本真佑花, 藤田篤, 大西菜奈美, 山田優. 翻訳の主観評価で用いられる表現. 言語処理学会第 27 回年次大会発表論文集, pp. 919–923, 2021.
- [6] Andrew Chesterman. **Memes of translation: The spread of ideas in translation theory**. John Benjamins, 2016.

A 山本ら [1] の英日翻訳方略体系

Syntactic strategy を表 5 に、Semantic strategy を表 6 に、Pragmatic strategy を表 7 に示す。各グループは、方略が適用の優先順位が高い順に並べられた「決定リスト」の形で整理されている。

表 5 Syntactic strategy		表 6 Semantic strategy		表 7 Pragmatic strategy	
ID	方略名	ID	方略名	ID	方略名
G2	Orthographic change	S9	Trope change	Pr1	Locale adaptation
G1	Substitution	S11	Causal change	Pr5	Illocutionary change
G13	Punctuation change	S14	Reference mode change	Pr2	Explicitness change
G9	Modality shift	S2	Antonymy	Pr3	Information change
G11	Addition	S4	Perspective change	Pr4	Interpersonal change
G12	Omission	S13	Focus change	Pr6	Coherence change
G14	Referential expression change	S12	Ambiguity change	Pr14	Cohesion change
G3	Word structure change	S3	Hyponymy	Pr13	External Information adaptation
G5	Phrase structure change	S5	Abstraction change	Pr12	Register adaptation
G6	Clause structure change	S7	Emphasis change	Pr15	Readability change
G7	Sentence structure change	S99	Other semantic changes	Pr99	Other pragmatic changes
G4	Unit shift	S100	No semantic changes	Pr100	No pragmatic changes
G10	Scheme change				
G99	Other syntactic changes				